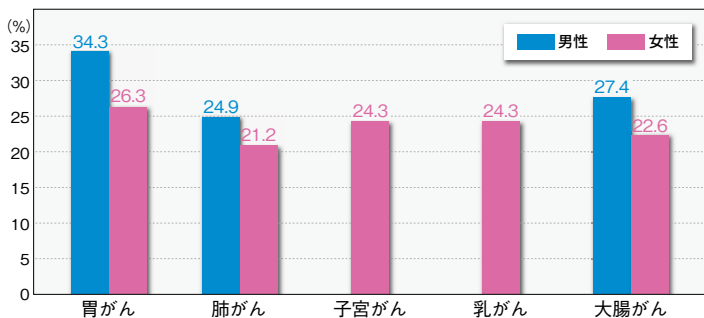


3 早期発見に大切な定期検診

肺がんは自覚症状が出てからではすでに進行がんとなっていて治療がしにくいいため、症状がないうちに発見することが重要です。40歳以上の人と喫煙者は、自覚症状がなくても年に一度、検診を受ける習慣をつけましょう。

ところが残念なことに日本は欧米に比べて、がんの検診受診率が大変低く、肺がん検診も40歳以上の男性の24.9%、女性の21.2%しか受けていません（下図参照）。胃がんや大腸がんの受診率に比べても低調で、前回の調査（2007年）に比べて男性は0.8%も下がっていて、肺がん患者の増加に歯止めがかからない一因となっています。市区町村や職場が実施している集団検診や人間ドックなどをぜひ利用してください。

また、近所に信頼できるかかりつけ医を持つことをお勧めします。検診を受ける医療機関がわからなければ紹介してくれますし、検診結果を受け取ったら、データの示す意味などを説明してもらい、生活上のアドバイスを受けるるとよいでしょう。もし検診後に再検査や受診の



●男女とも40歳以上(子宮がん検診は20歳以上。入院者は除く)で過去1年間に受診した人の割合
厚生労働省・国民生活基礎調査(2010年)より

●胸部CT検査

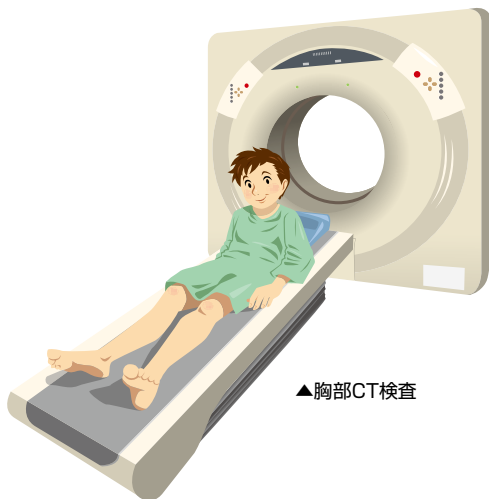
X線を使って胸部の内部（横断面）を鮮明に映し出し、がんの有無や大きさ、形、位置、周囲への広がりなどを調べます。ヘリカルCTの場合は、リングの皮をむくようにらせん状に回転しながら撮影し、従来のCTに比べて、短時間でがんの性質まで精度の高い

情報が得られます。喫煙者はヘリカルCT検査を導入している検査機関を選ぶとよいでしょう。

ただCT検査はX線検査に比べて被曝線量が多いという課題もあり、最近では低線量での撮影が推奨されています。

●腫瘍マーカー検査

体のどこかにがんができると、がんに関連したたんぱく質などが急に増えたり、新しくできたりすることがあります。この目印になる物質を「腫瘍マーカー」といい、血液検査で調べることができます。がんの発生臓器によって種類が異なり、基準値を超えた場合、がんの発生や部位を推測することができます。しかし、この検査だけでは早期の肺がんの発見は困難です。



▲胸部CT検査